

Raffiné Journal vol.03

表現に似合う瞬間

ある瞬間、
表現がその人に重なることがある。

動きでも、
表情でも、
ほんの短い仕草でも。

技術とは少し違う場所で、
一致が起きる。

あるパフォーマンスの途中で、
意図的に流し目をするパートがあった。

同じような演出でも、
浮いて見えることがある。

動きとしては成立していても、
どこか演出だけが前に出てしまう。

そのときは違った。

その一瞬だけ、
表現と人のあいだに
ズレがなかった。

演出が置かれているのではなく、
最初からそこにあったように見えた。

同じ振付でも、
人によって空気は変わる。

形は同じでも、
わずかな差が残ることがある。

その差は、
技術では埋まらない。

表現と人の関係の中に、
すでに含まれているものだからだ。

流し目のような演出は、
わずかに強度を持つ。

意図が前に出た瞬間、
それは浮き上がる。

けれどそのときは、
強さを持たず、
一つの動きとして音楽の中に溶けていた。

演出は主張せず、
ただそこに含まれていた。

表現が似合う瞬間には、
特別なことは起きない。

むしろ、
何も起きていないように見える。

それでも、
なぜかその人のものとして成立している。

ズレが消えたとき、
表現は初めてその人に属する。

歌やダンスのパフォーマンスは、
技術によって形になる。

けれど、
表現がその人のものとして現れる瞬間は、
別の場所から立ち上がる。

演出と人が一致したとき、
それは作られたものではなく、
最初からそこにあったように見える。

そのとき、
表現は“似合う”のではなく、
ただ存在している。

表現は、
一致した場所にだけ現れる。

似合うのではなく、
最初からそこにあったように。

Raffiné Journal vol.03
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné